

気象庁の震度情報システムが計測震度計に更新されて以来、震度の大きな地震が増加している。宮城県南部に 7 月 26 日未明と朝方さらに夕刻、余震どころか震度 6 強と弱の強い地震が相次いだ。一日 3 回の震度 6 以上の地震発生は初めてのケースで、定説を覆し、今後とも予断を許さない。

被災地の関係者はもとより、気象庁の担当者も夏休み返上で、不休の勤務。当日は大雨警報も発表され、被害の更なる拡大・二次災害などの影響が、広範囲に及び復旧に時間がかかっている。

今夏の九州各地、梅雨前線の停滞による集中豪雨と土石流災害で多くの人命・財産が失われた。情報流通と判断伝達システムの未整備から大災害が繰り返された。

地震と集中豪雨が併発するセット災害は最悪のパターン。現状、地震の予知は不可能で、気象庁地震対策専門家の泣き所。一方、降水現象は予測可能。雨による自然災害で、少なくとも人命の損失を未然に防ぐ事が可能であるから悔やみきれない。安全サイドといわれても、今最も重要なのは防災担当者や地域住民の本気の取組み。

水俣市の土石流災害は、皮肉にもそのことを世の中に知らしめ、今後の防災活動に一石を投じた。土石流のスピードは、短距離選手のメダル級の速さ。数秒の行動が運命を分けた。発生に遭遇したら、とても逃れられない。

よって、普段の情報網の整備と早めの対策が必須。当時、気象台発表の警報や大雨の実況が、市の防災担当者と被災者に正確に伝わるシステムがなかった。悪いことは重なり、早朝の時間帯、消防防災体制が機能せず。

長年の痛ましい災害を見聞し、「ウェザー・コンタクト」で、携帯電話に警報・地震情報のプッシュ型リアルタイムサービスを開発。既に、多くのユーザが活用中。何故か、自治体の防災担当者は僅少。最早、従来の公共型サービスでは、自然災害の予防に限界があることの啓示。

人命最優先を考へ、人知の及ばぬ土砂災害や土石流の恐さと予防の周知徹底。

早急に、携帯電話などモバイルの長所を活かし、自主防災情報システムを本気で活用する事を提案する。